

手話通訳・パソコン通訳あり

障害連シンポジウム2019

と
しょうがいしゃかいほううんどう
障害者解放運動が問うてきたもの、
～そしてこれからのあり方

2019年8月31日(土) 13:00(開場)～16:30(終了)

東京都障害者福祉会館 B1・B2会議室

内容:

- 第1部 入院時のヘルパー利用に関するアンケート調査結果報告
第2部 パネルディスカッション

「障害者解放運動が問うてきたもの、」

- 〈登壇者〉: 頼尊恒信さん (CILだんない 事務局長)
五位 渕真美さん (DPI障害者権利擁護センター)
太田修平さん (障害連 参与)

後援: 日本障害フオーラム (JDF) 日本労働組合総連合会 (連合) 日本障害者協議会 (JD)

DPI (障害者インターネットデジタル) 日本会議

「骨格提言」の完全実現を求める大フオーラム実行委員会

協力: 自治労東京都本部 東京都労働組合連合会 東京交通労働組合 自治労都庁職労働組合
都庁職福祉保健局支部

障害連 (障害者の生活保障を要求する連絡会議)

TEL 03(5282)0016 FAX 03(5282)0017

ホームページ <http://www9.plala.or.jp/shogairen/>

東京都千代田区神田錦町3-11-8 武蔵野ビル5階

目 次

- 脳性麻痺者運動が語りかけるもの
一内なるクロスディスアビリティと向き合う中で—
CILだんない事務局長 頼尊恒信 3
- 私と障害者運動からみえるもの
DPI 障害者権利擁護センター 五位渕真美 7
- 障害者解放運動と私
太田修平 9

脳性麻痺者運動が語りかけるもの

—内なるクロスディスアビリティと向き合う中で—

CIL だんない事務局長 頼尊恒信

1. はじめに

2. 「青い芝の会」の背景にあるものの検討

(ア) 端緒—光明養護学校—

① 語り

1. 大仏 (1975 : 11)

今日では、だいたい、私たちの理論が「青い芝の会」の中心になっているから、何となく「青い芝」の発祥地は茨城という誤解すら生じていると思うんだけど、本来は、東京の都立光明養護学校の同窓会から始まったものです。養護学校だから障害者が集まるんだが、そのなかで、どうしても脳性マヒ者は、同じ同窓生の中から疎外されていく。それで、脳性マヒだけの同窓会をつくらうとなったのが始まりです。

2. 二日市安 (後藤安彦 [1988 : 38-39])

一九五七 (昭和三二) 年の青い芝の会結成の報道は、ややオーバーに表現すれば、まさに闇のなかの光に等しかった。今の時点から振り返れば、当時の青い芝の会は脳性マヒ者同志が懨懨めいいたわり合うことだけを目標にした団体であり、対社会的な働きかけなどメンバーの誰にも考えられないほどの微温的な組織に過ぎなかったわけであるが、在宅で孤立無援の状況にあった私にとっては、そういう会が存在すると考えるだけでも心の支えになった。だから一九六〇 (昭和三五) 年に国立身体障害センターを修了した私が、その翌年早々青い芝の会に入会したのは至極当然の成り行きだった。

② 脳性麻痺は「同胞」として扱われる対象ではなく、むしろ疎外視されていた状況

③ この風潮が、「全身性障害者」という言葉を作り出す一因となっている

④ 果たして、それだけだったのであろうか

(イ) マハラバ村崩壊の理由

① マハラバ村住民たちの語り

1. 横塚 (1979 : 27)

有難い法話を聞き經典の勉強などに勤しんだというものではない。障害者特有の社会性のなさ、お互いのエゴのぶつけ合い、社会で差別され、こづき回されてきた故の人間不信と妙な甘え、家に閉じ込められていたが為の気のきかなさ、男女関係のもつれ等が渦巻き、それは壮烈なまでの人間ドラマであった。だからこそ歎異抄の世界を地でいったといえよう。

2. 横田 (1975 : 216-217)

「たとひ法然聖人にすかさされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも」という、絶対の他力感、言い換えれば和尚さんへの信頼感、契約の重み、そういったことが私の意識にあったかどうか。すべては「否」である。私がコロニー運動に参加したのは、結局、女が欲しかったからなのである。女と寝たかったからなのである。自分の生きる場が欲しかったからである。家にいれば「厄介者」になるしかなく、揚げ句の果てには「施設」に「収容」されなければならない立場から、どうしても逃れたかったからなのである。ただそれだけのことだったのである。だから、私はマハラバ村を捨てることが出来たのである。…中略…本当に和尚さんを信頼し得ていたら、マハラバ村が「障害者」運動の上でどの様な位置を占めているかを、私の内部でしっかりと把握し得ていたとしたら、私はマハラバ村に止まっていただろう。…中略…僧伽の思想性を充分把握し得ていたとしたら、仏陀が「五逆」の一つに何故「破和合僧」を数えたかも判り得たであろうし、その戒めを破ることはなかったであろう。

他の人はどうだったろうか。折本昭子氏の場合、これは明らかに和尚さんの思想に共鳴したと言えるだろう。矢田氏、成田氏の場合どうか。彼らは社会の中で生きること「疲れ」を覚えてしまったのではないか。そして、安住の地、安心して気兼ねなく仲間と生きられる場所、「健全者」があらゆる意味で介入しない、干渉しない空間を求めているのではないだろうか。小山氏の場合は、はっきり言って自分の「生活の場」としてのコロニーを望んでいた。コロニー運動を足がかりとして自己の力の拡大を考えていたのだと思う。横塚氏のことに関しては、これは正直言って判らないといった方がよいだろう。折本氏との結婚話で呼ばれたのだから、動機として私と同じだったとも言える。しかしそれだけのことで聡明な彼がコロニー運動に参加して行ったとは私には信じられない。当時彼は埼玉の実家で養鶏を行っていたから、その仕事に行きづまった、とも考えられるし、長男である彼が重度「障害者」であるのに引き替え末っ子の次男が「健全者」だった関係で父親との心理的な葛藤があったことも事実だろう。無論、その上に立って和尚さんの思想に共鳴し、脳性マヒ者の千早城としてのマハラバ村建設を考えていたろうことは言うまでもない。原田氏とその他の人の場合はどうだろう。これは明らかに、マハラバ村があるから来た、という感じが強い。その中では、原田氏、漆原氏などはそれなりの意識があって参加していったと言えなくもない。だがその他の人、鈴木健太郎氏とか海老沢圭一氏、あるいは原哲男氏、大川まり子氏などの人々は社会のしくみや親の御都合によって「放り込まれた」という現象が客観的にも認められたし、本人の意識もついにそこから脱出し得なかつたのである。「異端の系譜」で示した和尚さんの思想と理想、それをマハラバ村で実現させるにはあまりにも「障害者」は貧しかったのである。

- ② 意味
1. 「社会性のなさ」とは何だったのか？
 2. 肢体不自由に収斂させて自己主張していく必要性があった
 3. ただ、肢体単障と言えたのか？
3. クロスディスアビリティに向かって—全障連—
- ① 包摂し（され）ながら全障連へと
 - ② でも、「青い芝の会」は全障連には残らなかった
 - ③ そしてDPI（障害者インターナショナル）日本会議へ
4. 脳性麻痺とは—医学モデル的に見ると・・・
- (ア) 旧来の定義—厚生省（1969）
- ① 脳性麻痺とは受胎から新生児（生後4週間以内）までの間に生じた脳の非進行性病変に基づく、永続的なしかし変化し得る運動および姿勢の異常である。進行性疾患や—過性運動障害、または将来正常化するであろうと思われる運動発達遅延は除外する。
- (イ) 新定義—Executive Committee for the Definition of Cerebral Palsy（2005）
- ① 脳性麻痺は運動と姿勢の発達が障がいされた一群をさす。その障がいは、胎児もしくは乳児（生後1歳以下）の発達途上の脳において生じた非進行性の病変に起因するもので、活動の制限を生じさせる。脳性麻痺の運動機能障害には、しばしば感覚、認知、コミュニケーション、知覚、行動の障がいに伴い、時には痙攣発作がともなうことがある。
- (ウ) 最近の研究からみえる景色
- ① 感覚、認知、コミュニケーション、知覚、行動の障がいに伴い、時には痙攣発作がともなう
 - ② 身体・知的・精神・発達を併せ持つ「身」ということが明らかになる。
5. 「青い芝の会」の再興への動き
- (ア) 現状
- ① 東京⇒一歩の会
 - ② 広島⇒
 - ③ 滋賀⇒
- (イ) 意味—クロスディスアビリティ時代に、なぜ「再興」が必要なのか
- ① 脳性麻痺「患」者会／脳性麻痺者会
 1. この違いがそもそも大事
 - ② 内包するクロスディスアビリティ性

(ア) 脳性麻痺者という言葉の中に身体・知的・精神・発達を併せ持つ「身」

 - ① 「テーゼ」の表現

我らは自らがCP者であることを自覚する。

我らは、現代社会にあって「本来あってはならない存在」とされつつある自らの位置を認識し、そこに一切の運動の原点をおかなければならないと信じ、且つ行動する。我らは自らがCP者であることを自覚する。

(イ) 頸損連、頸損連、筋ジス協会などの障害別の患友会との違い

- ① 併せ持つ身であること／それを自覚すること
- ② そもそも「青い芝の会」が出来た由縁を明示している

(ウ) だからこそ、全障連への助走となったのでは。

6. おわりに：内なるクロスディスアビリティ性とどのように共存するのか？

(ア) 捨象してきた／捨象されてきた、インペアメントをどのように再構築するのか

- ① 知的・精神・発達を併せ持つ「身」の捨象とは
 1. 歴史的必然性
 2. 現在的意義
- ② インペアメントの捨象は、当然ディスアビリティも捨象される率が高くなる
- ③ ディスアビリティの捨象は、本来受け（られ）るべき、変更／調整（合理的配慮）が不明瞭となる

(イ) 合理的配慮の再獲得へ

(ウ) 「青い芝の会」の可能性

- ① 二つのクロスディスアビリティ
 1. 障害別／患友会別からのクロスディスアビリティ
 2. 「脳性麻痺者」というクロスディスアビリティ
- ② クロスディスアビリティを具体化する「鍵」としての脳性麻痺者へ
 1. あらゆる人々との共生の根源がみつかるとは。

■参考文献

頼尊恒信『真宗学と障害学—障害と自立をとらえる新たな視座の構築のために—』

頼尊恒信「脳性麻痺者における二次障害の受容の意味——真宗障害者福祉論の視

座から」熊本学園大学社会関係学会編『社会関係研究』14巻2号、71

～104頁

2019年8月31日

2019年度「障害連シンポジウム」

私と障害者運動からみえるもの

DPI 障害者権利擁護センター 五位渕真美

○健常者に近づくために頑張った子供時代

「養護学校はあっても養護社会はない」と外の社会へ思いを馳せていましたが、地元の幼稚園、小中学校に受け入れを拒否され、また少しでも体がよくなってほしいという両親の強い思いによるものから、5歳の時、肢体不自由児医療施設に入所し、併設された養護学校に通いました。施設では職員の顔色を伺い「水が飲みたい」とさえもいえず我慢した生活に、自分は生きる価値はあるのかなとよく思ったものです。

また12歳の時、両親の強い希望で、渡米し、脳障害を対象にした機能回復訓練ドーマン法をはじめました。学校を辞め、盆も正月もなく、両親が指導者となり、自宅で24時間の訓練を3年半続け、生きていることがつらい時期でありました。

○障害苦をわかちあえるところで

茨城から上京して、私が所属したのは文京区にある自立生活センターでした。そこは脳性麻痺の当事者スタッフばかりで、当時は日本でも珍しいセンターでした。海外から障害者が研修に来たときは「言語障害者に初めて会った」と言われ、よく笑った思い出があります。言語障害者と呼ばれて笑い飛ばせるようになったのは、やはり同じような背景をもつ仲間との出会い、障害苦をわかちあえる環境が強みとなったことによるものでしょう。思春期のころ、言語障害を有する脳性麻痺者に対する偏見は強く、障害者の中でも損のように感じていました。言語障害さえなければ…、不随意運動さえなければ…、車椅子に乗ればあとは体裁良く振舞える障害者であったのなら…、どんなに良かったらうか。今よりずっと生きやすかったに違いない。そういう思いが強くありました。

○花田春兆さんとの出会い

私の所属した自立生活センターで、利用会員であった花田春兆さんと出会いました。春兆さんも言語障害を伴う脳性麻痺で、文芸同人団体「しのめ」の主宰を63年間してこられた方です。「青い芝の会」は「しのめ」の同人であった3人により、1人は女性で、1957年の秋に結成されたと思います。

春兆さんとの出会いをきっかけに、私も「しのめ」にお邪魔するようになり、終刊号をどうするかという重苦しい空気が漂う編集会議にも出入りしていました。ちょうどこの会館で月一の会議があり、しのめ文芸誌も当時は書庫に保存されていたので、休日に通いその図書室で読みました。「しのめ」には、収容施設に入れられ、あるいは自宅で家族の管理下に置かれ、社会から隔絶したところにいた脳性麻痺者たちが、自らの言葉で自身の障害

に起因する苦しみや悩みをありのままに記されていました。当時も今も変わらないなと思いながら、なんだか、探していた物をやっと見つけたような安心感のようなものと、自分が探し求めた自分の位置の不安定さを共有できたようでした。自分の弱さを出せること、相手の弱さを知って受け入れること、そこに互いの共感が生まれます。弱さを語れるところでは、一人一人が生きている人間として立ち上がって、つながっていきます。感情や気持ちを共有することに重きを置いた「しのめ」で徐々に仲間をつくり、自己の存在、権利をアピールしていく日本の障害者運動のはじまりを知りました。

○当事者性って？

いっぽう私はアメリカから輸入した自立生活センターで約10年活動しました。介助派遣が忙しく、障害者の自立生活は、介助者と互いのちがう立場・価値観を綱交ぜしながら絶妙に保っていくもので、時に衝突するのは当然起こり得ることです。障害者を自立や人生に対する思い、そしてその環境を尊重し、それらを支えてくれる人たちの立場を配慮し、両者にできる限り寄り添うことを心懸けて、その調整に追われた日々でした。

どんな障害をもっているにもかかわらず主体的に地域で暮らすことを目的とした自立生活運動だが、制度化されたことで、サービス提供する側、される側の関係が明確化されてしまいました。あまりに忙しく、体調を崩して半年間の休職をせざるを得ないほどでした。利用者は都合の悪い介助者を嫌がり、介助者も都合の悪い利用者を嫌がり、健常者スタッフは監査を恐れ介助者が辞めるのを恐れ、障害当事者スタッフは介助の穴埋めもできず当事者性を貫く連帯する難しさを痛感し、私にはそのように見えてしまって、自分の限界を感じ離れることにしました。

○新しい知を求めて

春兆さんがいつも私に話してくださったように、しのめ全盛期だった時代と、今はあまりにも違うかもしれません。勢いと強さ、偉大さで溢れる当事者性が青い芝にはあったのでしょう。それでも「われらは愛と正義を否定する」という強烈な行動綱領を今の私には受け入れやすく感じます。介助を必要とする障害者かつ言語障害を合わせ持ち、さらに女性であるという、それはもうスペシャルな複合的困難におかれている立場で経験し得た知は、愛と正義を否定し、たたかってきた証しかと思います。

多様な人々が互いに尊重しながら暮らしていくには、さまざまな当事者の経験知に関心を抱き、思いや考えを共有する時間が大事だと思います。「しのめ」でそうしてきたように、「そういうこと、あるある」「ああ、そんな意味だったのか」「私の場合はこうだな」と、互いの経験を言葉で分かち合って答え合わせをするみたいに。それで決してすべてが解決するわけではないけれど、対立ではなく、対話を通して組み合わされる偏見や差別を一つ一つ解体していくことにつながるはずです。

「解放」とは何か

私が養護学校高等部を卒業したのは1976年だった。ちょうど同じ年に全国障害者解放運動連絡会議（全障連）が結成されたと記憶している。学校の先生に脳性マヒの方がいて、その先生に大会に参加しないかと誘われた。若い頃私は自民党的な考え方を持っていたので、「解放」という言葉には抵抗があった。人民解放軍というが、中国は共産党一党独裁ではないか、と疑問に感じていた。その頃教会に通っていて、牧師は「差別や抑圧の中で苦しんでいる人と共に生きるのがクリスチャンだ」と言っていたので、彼の影響で私も少しずつ考え方が変わった。障害者は現実に施設に閉じ込められ、非人間的な生活を強いられているのが現実である。人権を尊重するという考え方に立つならば、障害者解放ということに行きつくのは自然の成り行きであった。私は東京の青い芝の会に卒業した年に入り、学生ボランティアと一緒に第二回全障連大会（京都で開かれた）に参加した。やはり赤旗を持っている人、ヘルメットをかぶっている人が多く、その部分では強く違和感があったが、とにかく連帯していくことが大事だと思った。

3 団体共闘

その後東京の清瀬にある生活施設に入り、自治会活動を行っていく。東京の青い芝のリーダーに「お前には清瀬を改革する使命がある、そのために入るのだ」と釘を刺された。私は雑居部屋を一人部屋にしていくこと、入居者の施設運営への参加、介護態度について職員と話し合い、改善を求める等々、様々な問題に取り組まざるをえなかった、そこの自治会が障害連に参加し、多くの障害者とのつながりを求めたのだ。

いつのまにか障害連の役員になっていて、全障連、視労協、障害連の3団体共闘を進めていく。

自立生活運動との合流

90年代あたりから、アメリカからの障害者自立生活運動が日本にも広がりを見せる。自立生活運動の最大の目的は、障害者を施設や親元から地域社会に出し、制度を活用させて自立生活の実現を図ることだといえる。一人一人の障害者を施設から出していくことはとても大事であるが、その施設自体をなくしていくことも考えていかなければならない。既に書いた3団体共闘は自立生活運動を中心に展開しているDPIと合流するという大きな戦略を立てて、運動を進めていく。

障害者解放運動は、一人一人の問題を解決していくことも大切であると認識するが、差別や抑圧をつくり出している社会、あるいは人間の意識を変えていくことを最終目標においている。

最近、優生保護法による強制不妊手術の問題がようやくクローズアップされてきた。一方で、尊厳死を認めようとする動きや、胎児の遺伝子検査などの動きも小さくない。自らの意識を顧みながら、障害者解放という視点で、社会を変えていくことが求められる。それは障害者のみならず、すべての人の自由や人間の尊厳を大切にしていけることに通じるのである。